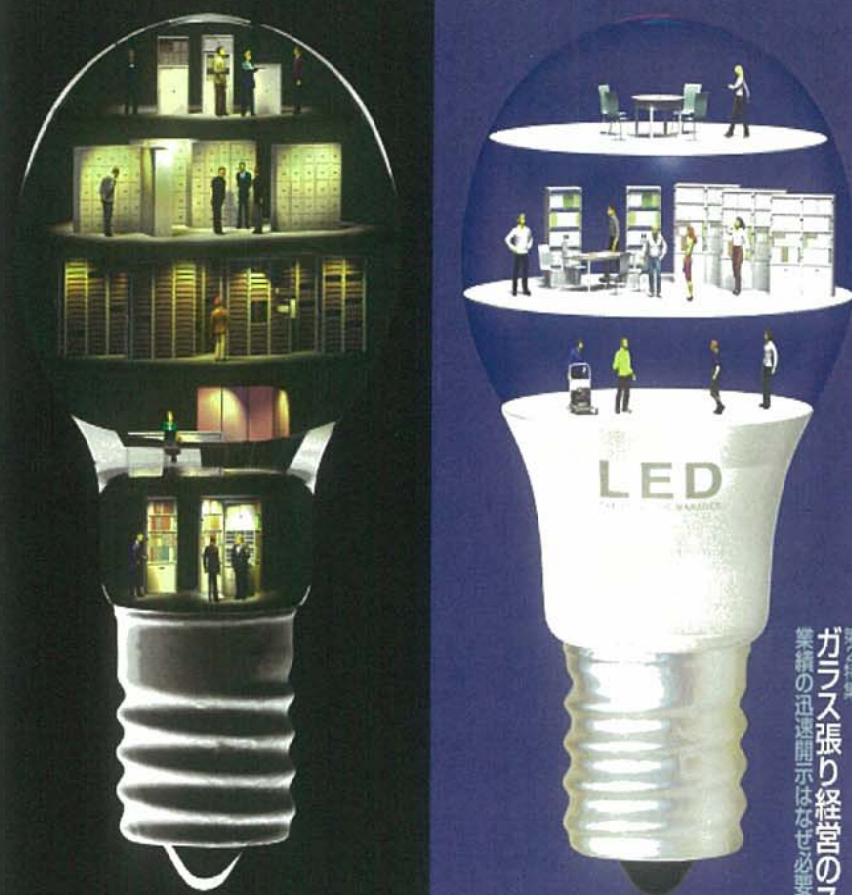


年商50億円を目指す企業の情報誌 The Strategic Manager

戦略経営者



第2特集
ガラス張り経営のススメ
業績の迅速開示はなぜ必要か...

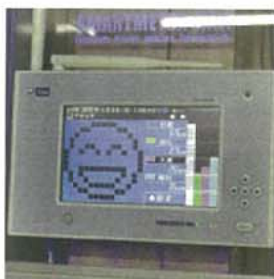
省エネ対策 徹底研究

特集1 省エネ対策徹底研究

ケーススタディ ①

栄光製作所 全社的なエコ活動で月次最大電力を3割カット

群馬県富岡市で基板の実装や組み立て、介護施設事業を展開している栄光製作所は、上場企業がこぞって会社見学に訪れるいま大注目の会社だ。大手企業でも受賞が難しいといわれている省エネ大賞（一般財団法人省エネルギーセンター主催）で省エネルギーセンター会長賞を2015年度に受賞したからである。勸使河原社長はこう胸を張る。



顔の表情で節電の進捗状況を確認できるスマートメーター



自作の引き戸を設置し障子から逃げる熱をシャットアウト



社内の各所に貼られている「最後まで閉めて」の注意書き



勸使河原社長

したが、専門チームを組んで受賞をわかってきている大手企業に比べて当社が受賞したのは本気でうれしく思っています。賞を取るために節電をしているわけはありますが、スタッフが会社のために長年取り組んできたことが外部に認められたことで、モチベーションアップには間違いなくつながったと考えています。

「照明をすべてLED化すれば確かに省エネになりますが、そんな投資余力のある中小企業は少ないはず。ハードの更新はあくまで最終手段と考えるべきでしょう。お金をかけない創意工夫やソフトに力を入れることである程度のことはいけます。」

度が上昇するのを防いでいるほか、空調効率を上げるために各フロアに扇風機を多数設置。常に空気を循環させて空温の偏りを解消しており、エアコンの効きを一定にすることに成功している。その際、押出しで空気の流れを調べられる「スマートケタスター」を使用するのがポイントだ。空気のよじみがどこにあるのか現場作業員が目視で確認できるため、空調効率への関心が共有できるという効果を生んでいる。

ことを徹底、さらにビル製のカートンを作成し、社内各所で間仕切りに使用して熱を逃がさない工夫をこらした。さらには空気の逃げ道となる階段にも手製の引き戸を設置。勸使河原社長は「スタッフからは若者層歓迎みたいで面白いと好評です」と笑う。

電源管理と生産管理を一体化

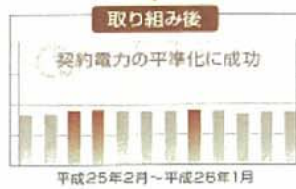
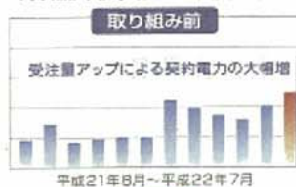
省エネの具体策を次々と実施する一方、勸使河原社長はエネルギー管理体制の構築にも着手した。省エネについて社員ひとりひとりが共通の問題意識を持つことが何より重要だと考えたからである。「省エネに関する責任者をエコーリーダーとして任命し、毎日朝礼で前日の電気使用量とその日のピーク電力予想時刻を公表しています。」

また外部講師を招聘し電気の基本料金の仕組みについて勉強会を実施し、社員全員の電気料金についての知識レベルを統一した。節電についての基礎的な教育を行ってうえで朝礼による毎日の情報共有を徹底することで、全社的な省エネ運動の機運を盛り上げたのである。さらに勸使河原社長は「電源管理を制するものは生産管理を制す」との標語を掲げ、エコ管理と生産管理の一体的な運営を目指した。生産現場とエコーリーダーを交えた電源管理会議を定例開催することで、運転電力の大きい機械の稼働が重ならないよう最適な生産スケジュールを組む体制を構築したのである。

「とにかく必死になって無駄な電気を使わない努力を続けてきました。その成果を実感できる方法がなかなかありませんでした。いわば暗闘のなかを手探りで進むようなものです。ところがこのシステムを導入してはつきりと電気の使用量を把握することができ、今までの取り組みが正しかったことを全員が確信できるようになりました。」

に販賣に焼き付いているという一売り上げが激減し金融機関からの運転資金融資もストップするという危機的な状況で、とにかくどんな仕事でも引き受けようとおよそ1週間もたたきつらなほどで作業をしたことがありました。しかしやはり寝ずに仕事をすると人間は体に不調を来すもので、突如燃え尽きたようになってしまったのです。そのとき、日頃はあまり仕事のできなかつたスタッフが「手伝います」と率先して手を挙げてくださいました。このときは本当に助かったと思えましたね。」

月次最大電力（デマンド値）の変化



取り組み前	取り組み後
月次最大電力 106kW	月次最大電力 73kW
月次最小電力 36kW	月次最小電力 66kW
その差 70kW	その差 7kW

人は環境次第で変わる
同社がここまで徹底した節電を追求するには深い理由がある。それは経営層に直向していた1990年代後半に勸使河原社長が経験したある出来事がきっかけだった。その日は今でも鮮明

そのスタッフは、動けない社長のかわりに指示通り機械を操作したおかげで、なんとか納期に合わせたことができた。勸使河原社長は「人は、環境が変われば必ずいいものを引き出せる」と痛感したという。人件費は削減しないという覚悟が決まればやるべきことはシンプルだ。固定費の大きな割合を占める残りの部分、電気代を徹底的に削減して社員に還元する利益を少しでも増やすことである。同社の省エネへの取り組みは、社員の成長を願う勸使河原社長の思いから始まったのである。